Department of

INTERMEDIA ART

TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

東京藝術大学 美術学部 先端芸術表現科 / 大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

Department of Inter-Media Art, Faculty of Fine Arts / Department of Inter-Media Art, Graduate School of Fine Arts

2024

先端芸術表現科が1999年に創立されてから20年以上が経ちました。広くメディアを横断する現代の芸術表現と人材育成をめざし、さまざまなプロジェクトを通して、地域とグローバル社会を結ぶ実践に、精力的に取り組んでまいりました。本学科の卒業生は多岐にわたっています。表現者として活躍する人材はもちろんですが、アートと社会を結ぶ仕事に就く者、また海外で活躍する者を輩出しています。私たちは「もっとも先鋭的な学科」であり続けたい。また、革新と伝統の継承との関係について探り続けたい。この航海に乗り込まんとする意欲にあふれた新しいメンバーを迎え入れたいと心から願っています。

More than 20 years have passed since the Department of Intermedia Art was established in 1999 as the most leading and challenging department in the Tokyo University of the Arts. The department has been vigorously engaged in a variety of projects that connect the local and global communities with the aim of fostering contemporary artistic expression and human resources across a wide range of media.
The graduates of our department are diverse. We have produced graduates who are not only active as artists, but also those who are working to connect art and society, and those who are active overseas.
We want to continue to be "the most radical department." We also want to continue to explore the relationship between innovation and the inheritance of tradition. We sincerely hope that we can welcome new members who are eager to embark on this voyage.

先端芸術表現科の理念と目標

1999年4月、先端芸術表現科は、美術学部の新設学科として生まれました。

東京藝術大学にそれまであった学科は、絵画や彫刻など、特定のメディアを研究・教育していく枠組みをとっていました。

本学科設置申請を行った趣意書には、「社会に対し積極的に活かす複合造形研究の視座に立って、急務としてある情報と環境に関わる新しい時代の造形表現の可能性を追求するため」と設立の趣旨がまとめられています。

このように、先端芸術表現科は、当初より、メディアを横断する学科として構想され、当時、一般化していったパーソナル・コンピュータを活用したメディア・アートを含む多様な領域について研究を行い、学部の学生についても、美術および隣接する表現を、幅広く、総合的に教育するカリキュラムをめざしました。

第1期生30人と当時の教員は、未開拓であったプログラムを、新たに模索するところから始めました。やがて、学生と教員がともに、考え、学び、制作を行うスタイルが固まっていき、学部カリキュラムが整備されるなか、2003年には、大学院美術研究科（修士課程）先端芸術表現専攻、2005年には、博士後期課程が設置され、完成年度を迎えました。

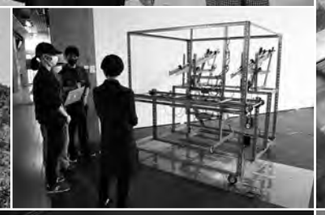
大学院においては、自らの専門性は何かを模索して生きた学生が集う場となりました。

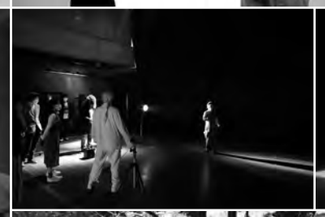
先端では、先端芸術表現科出身の学生ばかりではなく、本学の他学科、他学部、また他大学からの出身者も、特定の領域に偏ることなく、さまざまな教育を受けた学生を受け入れています。メディアを横断する本専攻の特色は、さらに深化しています。

学科設置からすでに、20年余りが経過しました。先端芸術表現科および、先端芸術表現専攻は、2001年にメディア教育棟が竣工してからは、写真、工作、コンピュータ、映像、音、身体などさまざまな分野のスタジオを核として、学部、大学院の教育・研究を一貫して行ってきました。視覚表現のなかでも、映像が大きな役割を果たしつつある今、映像リテラシーの教育も大きな意味を持っています。また、文化人類学や社会学の達成を踏まえたフィールドワークも、リサーチの方法として重視しています。

この間、横浜校地に新設の映像研究科、千住校地に音楽環境創造科が設立されるなど、これまでの美術学部、音楽学部2学部を主体とした教育組織も、時代とともに変化していきました。

これまで美術学部のほとんどの学科は、学部1年生の教育を取手校地で行ってきましたが、大学全体の方針として、1年生の教育





を上野校地で行うことになりました。先端芸術表現科も、2016年から、上野キャンパス絵画棟1階アートスペースを拠点として、1年生の教育を行っています。

こうした周辺の状況の変化とともに、先端芸術表現科および先端芸術表現専攻は、インターネットの急速な進展を踏まえ、グローバル化する社会に対応すべく、研究の幅を広げています。

多様なバックグラウンドを持つ常勤教員は、設立以来、それぞれが主宰する研究室に、学部3年生から学生を受け入れてきました。構成メンバーによって、研究・教育の実質的な内容が、常に変容していくのは、先端芸術表現科では当然のこととされています。先端芸術表現科の英語名であるIntermedia Artは、この学科の精神を現す重要な概念ですが、現在では、それとともに、多様性、ダイバーシティのような言葉が、この学科の追求すべき理念にふさわしいと考えています。

21世紀と先端芸術表現科の歴史は、抜き差しがたく重なっています。テロリズムや内戦は、この世紀も収まる気配さえありません。パンデミックは、人と人とのコミュニケーションを分断し、社会は孤立と絶望を深めています。

私たちは、表層的なことどもや一時的な流行にとらわれることなく、現在性のある問題を、日本ローカルではなく、国際的な視野を持って、根源的な場所から思考することが求められています。

そのなかで私たちは、欧米先進国に留まらず、アジア・オセアニアなどの多様な文化を受容し、他者とともに、共生、共創する意志を固めています。人類の大きな課題となっているジェンダーの問題、データを軸として新たな知見を追求するデータサイエンス、人間の労働環境と深く関わる人工知能（AI）、自然環境と地域社会を考える里山の構想などを、新たな研究テーマとして構想しています。

先端芸術表現科、および先端芸術表現専攻は、これまでも国際的な場で活躍するアーティスト、表現者を多数、輩出してきました。

卒業後、修了後の進路は、ここにすべてを網羅することがむずかしいほど、多岐にわたっています。先端芸術表現科ならではのユニークな人材が、社会の中で、広範囲に活動しています。

私たちが誇りとするのは、専門的かつ広範囲な美術教育を受けた卒業生が、ひとりの市民として、職業を選択し、自らの人生を追求しているところです。

先端芸術表現科の歩みは、まだ、はじまったばかりです。新しい海図をもって、道のない自由な旅に出かける決意を、私たちは固めたところです。

〈NEW YOKU/EVISBEATS〉
最後の手段(有坂亜由夢)/2018年

〈FUTURE PAST〉
アルカディリ・モニラ/2020年

〈8848〉©Naoki ISHIKAWA
石川直樹/2011年

〈Sound Building - RUHE〉アーバンドック豊洲市中心ビルのサウンドアート展示構想
及川潤耶/2024年/作品説明:ビル低層部1F(パーブリックスペース、1-2F階段、3階入口、屋外)

有坂亜由夢(最後の手段) Ayumu Arisaka | http://www.saigono.info/

アニメーション作家。1985年千葉県生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。手描きのアニメーションと大道具小道具を使ったストップモーションの手法などを融合させ、有機的に動かすアニメーションを制作。TV-CM、MV、広告のビジュアルなど様々な場で発表している。映像チーム「最後の手段」として活動中。MV「やけのはら/RELAXIN'」が文化庁メディア芸術祭2013エンターテイメント部門新人賞受 賞。MV「NEW YOKU/EVISBEATS」が文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門審査員推薦作品、NEWREEL AWARD ブロンズ受賞。

—

アルカディリ・モニラ Monira Al Qadiri | http://www.moniraalqadiri.com/

アーティスト。1983年セネガル生まれ、クウエート国籍。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。中東を中心に「悲しみの美意識」やジェンダー問題を取り上げ、石油カルチャーの未来を問う作品を制作している。2022年スペインのグッゲンハイム・ビルバオで個展を行い、第59回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展にも参加。現在はベルリンを拠点としながら、世界各国で展示やレクチャーを行う。

—

石川直樹 Naoki Ishikawa | http://www.straightree.com/

写真家。1977年東京都生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。2000年、Pole to Poleプロジェクトに参加して北極から南極を人力踏破、2001年、7大陸最高峰登頂達成。『CORONA』(青土社)により第30回土門拳賞を受賞。著書に開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』(集英社)ほか多数。2016年に水戸芸術館ではじまった個展『この星の光の地図を写す』が、新潟市美術館、高知県立美術館、北九州市立美術館、初台オペラシティなどに巡回。2020年『EVEREST』(CCCメディアハウス)『まれびと』(小学館)により写真協会賞作家賞を受賞した。

—

及川潤耶 Junya Oikawa | https://sonifidea.jp/

サウンドアーティスト。1983年仙台市生まれ。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。同年より公営メディア芸術センター「ZKM」の招聘芸術家として渡独、芸術家就労ビザを取得。ピナコテーク・デア・モデルネを始めとする美術館やフェスティバル、自然環境等で音の空間表現を展開、各国の豊かな芸術環境や人脈を通じて、幅広いキャリアを積む。2019年に法人「ソニフィデア」を設立。芸術技法から生まれた特許活用やサウンド・アートを起点とした思想で未来の価値創造を実践している。

—

大山エンリコイサム Enrico Isamu Oyama | http://www.enricoisamuoyama.net

美術家。ストリートアートの一領域であるエアロゾル・ライティングのヴィジュアルを再解釈したモティーフ「クイックターン・ストラクチャー」を起点にメディアを横断する表現を展開。イタリア人の父と日本人の母のもと、1983年に東京で生まれ、同地に育つ。2007年に慶應義塾大学卒業、2009年に東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。2011–12年にアジアン・カルチュラル・カウンシルの招聘でニューヨークに滞在以降、ブルックリンにスタジオを構えて制作。2020年には東京にもスタジオを開設し、現在は二都市で制作を行なう。

—

小田原のどか Nodoka Odawara

彫刻家、評論家、出版社代表。1985年宮城県生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。作品制作、研究、評論執筆、出版社の経営を行う。単著に『近代を彫刻/超克する』(講談社、2021年)、『モニュメント原論』(青土社、2023年)。主な展覧会に、2023–24年「近代を彫刻/超克する—津奈木・水俣編」(個展、つなぎ美術館)、「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか?」(国立西洋美術館、2024年)など。『東京新聞』『芸術新潮』で評論を連載(2024年5月時点)。

〈FFIGURATI #162〉©Enrico Isamu Oyama / EIOS
大山エンリコイサム/2017年/撮影:Shu Nakagawa

〈A Happy Birthday〉
菅 実花/2020年

〈L(1923-1951)〉あいちトリエンナーレ2019
小田原のどか/2019年/撮影:平林岳志

〈bystander #014〉
片山真理/2016年

〈father〉
金川晋吾/2016年

片山真理 Mari Katayama | http://marikatayama.com

1987年埼玉県生まれ、群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。主な展示に、2023年「Performer and Participant」テート・モダン(ロンドン)、2021年「home again」ヨーロッパ写真美術館(パリ)、2019年「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ」アルセナーレ、ジャルディーニ (ヴェネチア)、2017年「無垢と経験の写真日本の新進作家 vol.14」東京都写真美術館(東京)、2016年「六本木クロッシング2016展:僕の身体、あなたの声」森美術館(東京)、2013年「あいちトリエンナーレ 2013」納屋橋会場(愛知)など。2020年第45回木村伊兵衛写真賞を受賞。主な出版物に2019年「GIFT」United Vagabondsがある。

—

金川晋吾 Shingo Kanagawa | http://kanagawashingo.com/

写真家。1981年京都府生まれ。2006年神戸大学発達科学部人間発達科学科卒業。2015年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。2016年『father』(青幻舎)、2021年『犬たちの状態』(太田靖久との共著、フィルムアート社)、2023年『いなくなっていない父』(晶文社)、『長い間』(ナナルイ)、『集合、解散!』(植本一子、滝口悠生との共著)を刊行。近年の主な展覧会、2018年「長い間」横浜市民ギャラリーあざみ野、2022年「六本木クロッシング2022展:往来オーライ!」森美術館など。

—

菅 実花 Mika Kan | http://mikakan.com

1988年神奈川県生まれ。2021年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。2016年にラブドールを妊婦の姿に加工し撮影した修了作品《The Future Mother》で注目を集める。主な個展に2019年「The Ghost in the Doll」原爆の図丸木美術館(埼玉)。2021年「仮想の嘘か | かそうのうそか」資生堂ギャラリー(東京)。出版に2018年共著『〈妊婦〉アート論』(青弓社)。2021年より『週刊読書人』で写真とエッセイを連載中。VOCA展2020奨励賞受賞。

今日マチ子 Machiko Kyo | http://juicyfruit.exblog.jp/ twitter: @machikomemo

漫画家。1P漫画ブログ「今日マチ子のセンネン画報」の書籍化が話題に。4度文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品に選出。戦争を描いた『cocoon』は「マームとジプシー」によって舞台化。2014年に手塚治虫文化賞新生賞、2015年に日本漫画家協会賞大賞カーツーン部門を受賞。『みつあみの神様』は短編アニメ化され海外で23部門賞受賞。コロナ禍の日常を絵日記のように描いた『Distance わたしの#stayhome日記』は2022年1月に『報道ステーション』にて特集で紹介、2023年4月から町田市民文学館ことばらんどにて『今日マチ子「わたしの#stayhome日記」2020-2023展』を開催。近著に『かみまち』『すずめの学校』。2024年3月から新連載『おりずる』がスタート。2025年にはNHKにて『cocoon』のアニメ化が決定している。

—

小森はるか＋瀬尾夏美 H. Komori + N. Seo | http://komori-seo.main.jp/

映像作家の小森はるか（2015年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了）と画家で作家の瀬尾夏美（2011年同大学先端芸術表現科卒業）によるアートユニット。東日本大震災をきっかけに結成。2012年よりおよそ10年間、岩手県陸前高田市および仙台市に暮らしながら制作に取り組む。2015年、東北で活動する仲間とともに、土地と協働しながら記録をつくる組織・NOOKを設立。現在はNOOKとして、江東区でstudio04を運営しながら、全国各地に赴いてフィールドリサーチを行い、制作と対話の場づくりをしている。主な作品に「波のした、土のうえ」（2014）、「二重のまち／交代地のうたを編む」（2019）、「11歳だったわたしは」（2021–）、「山つなみ、雨間の語らい」（2021）がある。

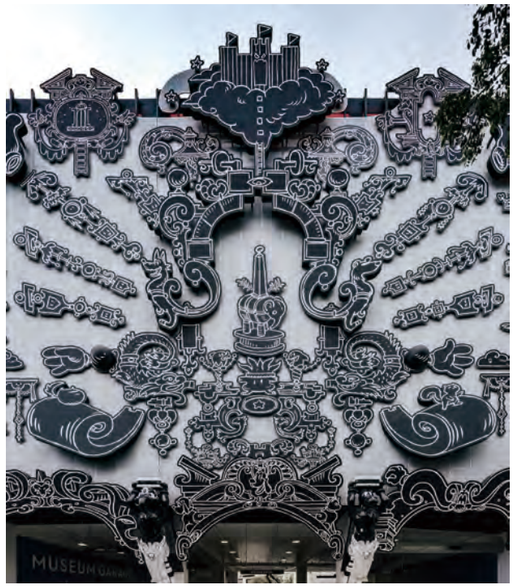
—

ニコラ・ビュフ Nicolas Buffe | http://nicolasbuffe.com/

アーティスト。1978年フランス・パリ生まれ。2007年以降東京に拠点を移す。2014年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。ヨーロッパの古典美術、日本や米国のサブカルチャーの混合をちりばめた作品で知られる。ファッション、建築、ビデオゲーム、オペラのアートディレクション等、美術以外での活動も多い。2014年、原美術館にて個展「ポリフィーロの夢」が開催された。デザインを手がけたビル『Museum Garage』が2018年春マイアミでオープンした。2018年冬東京銀座シックスにて大型作品が展示される。同年フランス芸術文化勲章受章。

『かみまち（上）』
今日マチ子 / 2023年 / 集英社

《二重のまち／交代地のうたを編む》
小森はるか＋瀬尾夏美 / 2019年 / 撮影：Morita Tomomi



《Museum Garage》マイアミ・デザイン地区（アメリカ）
ニコラ・ビュフ / 2018年

Clavel Arquitectos; J. Mayer H.; K/R, Keenen Riley; Nicolas Buffe; WORK AC.
Curation: Terence Riley / Development: Craig Robins（DACRA）/ Architect-of-the-record: Tim Haahs.
Photo: ImagenSubliminal（Miguel de Guzman + Rocio Romero）

《海で考える人》
潘逸舟 / 2016年

潘 逸舟 Ishu Han | http://www.hanishu.com/

美術家。1987年中国上海市生まれ。2012年東京藝術大学美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。現在東京在住。主な展覧会に2017年「The Drifting Thinker」MoCAバビリオン（上海）、2021年「MOTアニュアル2021—海、リビングルーム、頭蓋骨」東京都現代美術館（東京）、「ぎこちない会話への対応策—第三波フェミニズの視点で」金沢21世紀美術館（石川）などがある。2020年「日産アートアワード」2020グランプリを受賞。

—

藤田俊太郎 Shuntaro Fujita | http://www.my-pro.co.jp/aa/fujita.html

演出家。1980年秋田県生まれ。2005年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。在学中の04年、ニナガワ・スタジオに入る。15年まで蜷川幸雄作品に演出助手として関わる。14年以降、演出作多数。23年演出作「LOVE LETTERS」「Sound Theater 2023」「ラビット・ホール」「ヴィクトリア」「ラグタイム」「東京ローズ」。読売演劇大賞/第22回優秀演出家賞・杉村春子賞、第24回最優秀作品賞・優秀演出家賞、第28回優秀作品賞・最優秀演出家賞、第31回大賞・優秀作品賞・最優秀演出家賞、第42回菊田一夫演劇賞、第42回松尾芸能賞優秀賞受賞。

—

松下 徹 Tohru Matsushita

1984年神奈川県生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。オートマッチックに絵を描くシステムを作り出し、それが生み出した図像をさらにコラージュ／編集するプロセスを経た絵画作品を制作している。また2012年よりアートチームSIDE COREの一員としてストリートアートをテーマにギャラリーや美術館、公共空間や廃墟まで様々な場所で展覧会を開催している。2022年にはシビック・クリエイティブ・ベース東京（CCBT）のフェローに選出。またアートフェア「EAST EAST_TOKYO」や、ギャラリー「PARCEL」（馬喰町）のアートディレクションを行なっている。主な展覧会に2022年「Reborn-Art Festival」（石巻市）、「六本木クロッシング」（森美術館）、2023年「やんばるアートフェスティバル」（大宜見村）、「奥能登芸術祭」（珠洲町市）など。

—

宮永愛子 Aiko Miyanaga | http://www.aiko-m.com/

美術家。1974年京都市生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。主な個展に、2012年「宮永愛子：なかそら—空中空—」国立国際美術館（大阪）、2017年「みちかけの透き間」大原美術館有隣荘（岡山）、2019年「宮永愛子：漕法」高松市美術館（香川）、2023年「宮永愛子　詩を包む」富山市ガラス美術館（富山）。2013年「日産アートアワード」初代グランプリ、2020年第70回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

—

目 [mé]

個々のクリエイティビティを特性化した、連携を重視するチーム型芸術活動。この世界を私たちの実感に引き寄せようとする作品を展開。中心メンバーは、アーティストの荒神明香（2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了）、ディレクターの南川憲二（2009年同専攻修士課程修了）、インストーラーの増井宏文の3名。主な活動に、2014年「たよりない現実、この世界の在りか」資生堂ギャラリー、2019年「非常にはっきりとわからない」千葉市美術館、2019–21年「まさゆめ」Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13、2022年「matter α, matter β」（ハワイ・トリエンナーレ2022）などがある。「さいたま国際芸術祭2023」ではディレクターに就任。第28回（2017年度）タカシマヤ文化基金受賞。「VOCA展2019」佳作賞受賞。

《ラグタイム》写真提供：東京演劇部
藤田俊太郎 / 2023年

《dream house》
松下 徹 / 2024年 / 撮影：Osamu Nakamura

《くぼみに眠る海》写真提供：富山市ガラス美術館
宮永愛子 / 2023年 / 撮影：木奥惠三

《まさゆめ》Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13
目 / 2019–21年 / 撮影：Takahiro Tsushima

FRESHMAN

1年次 ［テーマ］自己を知る

1年次では、実技・必修講義など授業を上野校地を基本に行います。様々な専門性に特化したスタッフによるスタジオでの演習授業を中心として、先端アカデミックスキル、コンセプチュアル・アート、写真、デザイン、工作・立体造形、身体表現、音楽、映像、など、多種多様なメディアの特性を分野横断的に学びながら、表現活動に必要となる基礎的な知識や技術の習得を目指します。また、コンピュータの操作方法、芸術批評や理論、リサーチやプレゼンテーションに必要な語学力も集中的に身につけることによって、基本的な読解力、柔軟な構想力、創造的な思考力を鍛えます。このように、実技と理論の両方をバランスよく学び、多彩な経験を積み重ねることによって、新たな表現を生み出すための能力や素養を身につけていきます。

スタジオ講習「工作」

SOPHOMORE

2年次 ［テーマ］他者と外部を知る

2年次では、実技授業を取手校地を基本に行います。前期の「スタジオ選択カリキュラム」では、1年次に学んだ知識や技術を応用し、多様なメディアを選択的・複合的に扱い、独自の表現方法を探求します。後期の「フィールドワーク」では、グループワークを基本として、学外の特定の地域をリサーチし、そこで得られた知識や情報に基づきながら、作品制作を行います。異なる個性や意見をもったメンバーが綿密なリサーチ、議論、交渉を行い、作品プランを実現させる一連のプロセスを学びます。「ポートフォリオ制作」では、画像編集からレイアウト、製本に至るエディトリアルデザインを学び、過去の自分の活動をまとめて他者に伝えるための技術を習得します。さらに、2年次の成果は学生の主体的な企画・運営によって開催される「成果展」で一般公開されます。

成果展

JUNIOR

3年次 ［テーマ］関係をつくる

3年次では、教員別の「研究室」に所属し専門的な指導の下、1〜2年次で学んだスタジオ指導から自分の専門性を模索、思考し創作研究を行います。各研究室の内容は多岐に渡り、個人制作と研究室での活動との両輪をうまく利用して、さらに表現の幅を広げていくことが求められます。また、「IMA実技Ⅲ」で、展示を実践する経験を積み重ねます。2〜3年次に選択履修できる「IMA演習」は、外部から多彩な顔ぶれのゲストアーティストや講師を招いて学年横断的に行なう短期集中の演習授業で、表現に対する知見を広げていきます。「古美術研究旅行」では毎年テーマを設定し、熊野、奈良、京都を中心に日本の古美術を見学します。本科独自の行程により、日本の伝統文化・美術に対する造詣を深めます。

古美術研究旅行

SENIOR

4年次 ［テーマ］統合する

卒業制作を中心に、これまでの制作・研究活動を集大成していきます。所属研究室の教員の指導の下、領域横断的理論と実践を鍛えていきます。前期に「WIP（Work In Progress）展」、後期には「最終審査会」と段階を踏みながら進みます。「卒業修了作品展」に向けては個々の作品制作とともに、展覧会の企画運営にも学生が主体的に取り組んでいきます。

—

卒業修了作品展について

集大成の展示である「卒業修了作品展」は、毎年1月に東京都美術館で開催されます。先端芸術表現科ではイベント、広報デザイン、展示配置など、学生が主体となり展覧会を運営します。学生が制作するカタログは毎年趣向を凝らしたデザインと内容になっています。

最終審査会

美術学部 先端芸術表現科 カリキュラムチャート

2024年度（参考）

大学院美術研究科のカリキュラムは右記のQRコードからご確認ください。

	前期	4月→7月						後期	10月→1月		
1年次	メディアリテラシー	先端アカデミックスキル	コンセプトメイキング	写真	デザイン	マケット	工作・立体造形	身体	音楽＋映像	UI&UX	成果展
2年次	工作・立体造形 or 音楽	映像 or 身体	IMA演習Ⅰ	電子工作 or 写真	フィールドワーク	ポートフォリオ制作	成果展				
3年次	研究室配属＋ゼミ活動	IMA実技Ⅲ	古美術研究旅行	IMA実技Ⅲ	IMA演習Ⅱ	IMA実技Ⅲ	ゼミ活動	成果展			
4年次	ゼミ活動				WIP展	事前審査会	最終審査会	卒業修了作品展			

大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

修士課程　修了制作・研究に向け、各自の問題意識、動機、スキル、方向性に合わせ、担当教員による集中的な個別指導が行われます。また、そのための基礎教育として、1年次は、全教員によるレクチャーを中心にカリキュラムが組まれています。また、ヴィジティング・アーティストのシステムを設け、外部で活躍中の作家や批評家を招いて、活発なディスカッションを行うなど、多様なプログラムを設けています。

博士後期課程　作家、研究者、教育者として、外部に通用するだけの十分な知識と経験、見識とスキルの習得が求められます。学内外のリソースを活用し、独創的な研究創作によって、プロジェクトを世に問うていくことが必要です。そのための機会と環境が提供されます。作品制作や研究発表によって新たな知見を得、それに基づきながら博士論文を執筆します。

国際交流・留学

先端芸術表現科ではグローバルな視野や国際的に活躍できる人材を育成するため、留学制度を設けています。アジア、欧米の大学に留学し、さまざまな文化に接することができます。海外の留学生の受け入れも行っており、さまざまな国の学生と交流しています。

—

留学生派遣・受入先［韓国］ソウル大学校美術大学、韓国芸術綜合学校［中国］中央美術学院、清華大学美術学院［イギリス］グラスゴー芸術大学［オーストリア］ウィーン応用芸術大学［ドイツ］ワイマール・バウハウス大学、シュトゥトガルト美術大学［フランス］パリ国立高等美術学校 ほか

美術学部対象校全60校、
うち先端対象機関36校（2023.4.1現在）
右写真：ワイマール・バウハウス大学の授業風景

メディア教育棟 | INTERMEDIA LABORATORIES

1F | ギャラリー
Gallery

天井高約8mのギャラリースペースになり、電動クレーンも併設しており、大型の作品も展示可能です。板張りの床なので、パフォーマンス等の発表にも使用しています。

101 | リハーサルルーム
Rehearsal Room

スタジオ講習「身体」等で使用するスタジオです。日頃はパフォーマンス、ダンス、演劇などの稽古にも利用しています。壁一面が鏡張りなので、練習の際にも活用できます。

103 | 写真スタジオ
Photo Studio

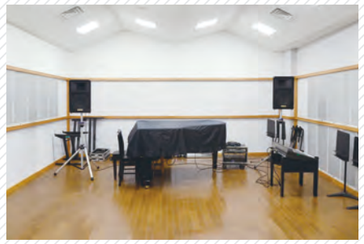
電動バンクライト4機、ホリゾントなど設備されています。講習を受ければ、ストロボなど高度なスタジオ撮影が可能です。作品の記録撮影やポートレート撮影などに最適な環境です。

107 | 写真演習室
Photo Laboratory

スタジオ講習「写真」等で使用するスタジオです。暗室を完備しており、現像からプリントまで銀塩写真の技法を体系的に学べます。他にもカラー暗室、大型引き伸ばし機も完備しています。

109 | 工作室
Work Studio

スタジオ講習「工作」等で使用するスタジオです。講習を受けた学生は、設備を使用でき自由制作をすることができます。パネルソーや、溶接機など各種工作機械を設備しており、木工や金工、各種素材の制作が可能です。

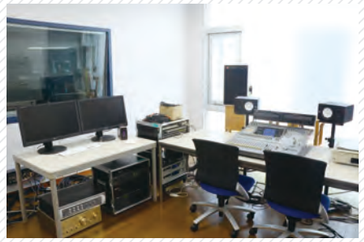


201 | 音楽スタジオ
Recording Studio

スタジオ講習「音楽」等で使用するスタジオです。高い遮音性と最適な響きを確保しています。ゆとりある広い空間で音楽関係の授業で使用されるほかにも、生演奏や音声の録音、楽器のレッスンなど学生の多様な制作作業にも対応します。

202 | 音楽プロジェクトルーム
Music Laboratory

音楽スタジオに防音ガラス窓を通して隣接するコントロールルームです。本格的なPA機器とデジタルレコーディング機材を完備し、録音のコントロールから編集作業、マスタリングまでを行なうことができます。



208 | コンピュータースタジオ
Computer Studio

28台のiMac、レーザー加工機、3Dプリンターを設備しており、映像、音楽、デザインなどの基礎的な授業を行います。授業外は常時開放しており、自由制作が可能です。

307 | 映像編集スタジオ
Image Editing Studio

スタジオ講習「映像」等で使用するスタジオです。実技の映像授業では、映像の基礎となる撮影をレクチャーし、スタジオで編集作業を指導します。映像編集スタジオでは、Premiereなどを使用し、より専門的な編集作業を行います。

308 | デジタルプリントスタジオ
Digital Print Studio

スタジオ講習「デザイン」等で使用するスタジオです。Illustrator、Photoshop、InDesignなど、DTPアプリケーションを使用した制作を行うスタジオです。写真編集用のカラーマネジメントモニター、大判プリンター、カッティングプロッター、製本機材等が使用できます。

上野キャンパス | Ueno Campus

1年次の実技、必修講義は上野キャンパスを中心に、美術学部絵画棟1階アートスペースやAMC（芸術情報センター）を使用し、授業を進めて行きます。

INTERVIEW 1

Shugo KASHIWAGI

柏木崇吾 さん

2023年度 | サロン・ド・プランタン賞

柏木崇吾 Shugo KASHIWAGI
1996年東京都出身。地面から掘り起こした天然の粘土に、採集した草木や種子などを練り込んだものを素材に立体の制作を行う。練り込まれた種子はやがて発芽し物体をおおい、また乾燥が進む部分においては亀裂が生じ、内なる繊維が露出する。生と死、瞬間と永遠、身体と環境、自然と人工物。あらゆる時間軸と状態を交差させ、新たな風景としての再配置を試みる。

入学動機について

先端芸術表現科は、様々な表現方法にアクセスできる幅広さが魅力的でした。受験前から取手校地の広々とした雰囲気や、多彩な素材に対応する工房群も非常に気に入っていました。入学後は、様々なメディアでの実践を通じて自分の方向性を見極める時間があります。

—

自分の活動について

掘り起こした天然の粘土に、採取した枯れ草や種子などを練り込んだものを素材に塑造を行い、そこに自然物や木や鉄の構造体を組み合わせることで、景色の中に感じた特別な眼差しを再構成する制作をしています。時間の経過と共に、練り込まれた種子は表面から芽を出し全体を覆い、また一方で乾燥が進むと表面がひび割れ、内部にある植物の繊維が露出します。塑像が持つ人体的な存在感に、有機的な素材と無機的な素材を織り込むことで、様々なイメージが混合されながら相対化することを目指しています。

—

受験生へのメッセージ

社会において自分らしさとは何か、求められているものは何か、無理に考えるほど実感は遠のき、虚しさに苦しめられることがあります。そんな時は、とりあえず息を抜いて、どこかを散歩してみるのもいいと思います。自分が何を見て何に反応しているのか、新しい発見があるかもしれません。

〈ある閉ざされた「一個」のうちに〉
2024年/採取した粘土による塑像、ミクストメディア/撮影:柏木崇吾

INTERVIEW 2

Rin SHIMAMURA

島村 凜 さん

2023年度 | 平山賞

島村 凜 Rin SHIMAMURA
2002年神奈川県生まれ。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科4年。富士山噴火や川の氾濫などのリサーチを元に、居住・生活に関する作品を展開している。また、リサーチの過程で知らない人に話しかけてインタビューを行うなど、他者との交流に焦点を当てることを試みている。

入学動機について

自分の身の回りの社会や他者との関わり方を探るため、先端芸術表現科への受験を決めました。また、関心やテーマに沿って表現方法が変わっていくことは自然なことだと思っていたので、その点でも先端芸術表現科は自分に合っていると感じていました。

—

自分の活動について

富士山噴火や川の氾濫などのリサーチやインタビューを元に、居住・生活をテーマとした作品を制作しています。私の作品には必ず私以外の他者が登場し、彼らの視点や経験を知ることができます。3年生の時に制作した《忘れられた音を継ぐ》では、90年前の曽祖父の蓄音機をきっかけに、昭和モダニズムから戦争へと向かっていった当時の日本について話し合える場を制作しました。発見した時に全く動かなかった蓄音機を修復し、実際にその音を聴くことで当時の生活を感じることができました。

—

受験生へのメッセージ

先端芸術表現科では様々なメディアに挑戦することができます。毎回の課題に取り組む度に自分の視野が広がっていくのが実感できてとても良い経験になると思います。自分の深いところまで潜って向き合い続けることは大変ですが、大切なことです。がんばってください。

〈忘れられた音を継ぐ〉
2023年/曽祖父の蓄音機、SPレコード、年表、映像/撮影:島村 凜、白川茜紅

卒業後の進路 | CAREERS

多様な関心をもった先端芸術表現科の学生の進路は多岐にわたります。研究を続けるために他大学を含む大学院に進学する者、アーティストとして活躍の場を広げていく者はもちろん、起業によって新しい仕事を生み出す者、一般企業や教育機関に就職し、本科での経験、探究を実社会で生かそうとする者も増えています。

近年の主な就職先

株式会社アートフロントギャラリー
株式会社乃村工藝社
株式会社青土社
株式会社JR東日本サービスクリエーション
株式会社スパイク・チュンソフト
株式会社セガエンタテインメント
株式会社TBSテレビ
株式会社ディー・エヌ・エー
株式会社電通
株式会社東北新社
株式会社ドリコム
株式会社バンダイナムコエンターテインメント
株式会社ボーネルンド
株式会社吉本興業ホールディングス
株式会社読売広告社
株式会社レベルファイブ
公益財団法人現代芸術振興財団
実教出版株式会社
ソニーグループ株式会社
トヨタ自動車株式会社
日本放送協会(NHK)
任天堂株式会社
福岡アジア美術館
有限会社コズフィッシュ
有限会社文平銀座
Warhorse Studios
We Are Social

教育研究機関

〈国公立〉
九州大学
情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]
東京藝術大学
鳥取大学
人間文化研究機構 人間文化研究創発センター

〈私立〉
京都芸術大学
女子美術大学
名古屋造形大学
武蔵野美術大学
明治大学

近年の主な進学先

チューリヒ芸術大学大学院
東京大学大学院
東京藝術大学大学院
東京工業大学大学院
横浜国立大学大学院

五十音順

2025年度以降の各領域および各研究室の詳細は、右記のQRコードからご確認ください。

知覚と記憶

第1研究室（作品コンセプト・グローバル社会とアート）

Natsumi Araki

荒木夏実

准教授 | キュレーター・評論家（現代美術）

パリ（フランス）生まれ。慶応義塾大学文学部卒業、英国レスター大学ミュージアム・スタディーズ修了。三鷹市芸術文化振興財団（1994–2002）、森美術館（2003–2018）のキュレーターを経て、2018年より現職。「ゴー・ビトゥイーンズ展：こどもを通して見る世界」（2014）で第26回倫雅美術奨励賞、第10回西洋美術振興財団学術賞受賞。現代美術と社会との関係に注目し、アートをわかりやすく紹介する活動を展開している。

他者を知ることによって自分を発見し、パーソナルな体験をパブリックな世界とつなげること。それを可能にするのがアートの力です。多様な素材や手法を用いながら、作り、考え、議論し、批評する。先端はこのように総合的な表現力を学ぶことのできる場です。アートを通して自分自身や社会に向き合ってほしいと願っています。

第2研究室（写真・映像）

Risaku Suzuki

鈴木理策

教授 | 写真家

1963年和歌山県生まれ。東京綜合写真専門学校研究科修了。写真を中心とする作品を制作している。主な展覧会に「写真と絵画 — セザンヌより 柴田敏夫と鈴木理策」（2022年、アーティゾン美術館）、「意識の流れ」（2015–2016年、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・東京オペラシティギャラリー・田辺市立美術館）、「熊野 雪 桜」（2007年、東京都写真美術館）など。第25回木村伊兵衛写真賞、第22回東川賞国内作家賞、2008年日本写真協会年度賞など受賞。

写真や映像はカメラという機械によって知覚されます。身体と異なり、行動の有用性を持たないため、そこに現れる像は主観と客観が流動的に混じり合う。撮影者の意識を感じたり、記録として機能したりする様に。また、そこから想起される記憶は様々で、見る人によって経験の深さは異なります。写真や映像はうつしたものであり、うつってしまったものでもある。制作ではそこから考え始めてみるのが良いのではないでしょうか。

第3研究室（映像・インスタレーション）

Chikako Yamashiro

山城知佳子

准教授 | 美術家・映像作家

1976年沖縄県生まれ。沖縄県立芸術大学大学院修了。詩的イメージとストーリーを通じて、映像、写真、パフォーマンス表現をマルチチャンネルのスクリーンとサウンドインスタレーションなど様々な映像製作の技術を試み、映像の潜在性と可能性に挑戦し続けている。主な個展に「山城知佳子 ベラウの花」（2023年、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）、「山城知佳子 リフレーミング」（2021年、東京都写真美術館）など。

声に重力を感じたり、息に色を感じたり、残響音から過去と現在を繋げたり。カラダで感じる微細な感覚を捉え、信じ、表現し、他者へと繋げてゆく。移ろう社会で自身のカラダが鋭敏に感じ触れる処に先端なものがあり、そこから一歩踏み出して表現の冒険が始まる。未然の何かに出会う冒険は新しいアートを創り出す力になるのだと思う。

言語と身体

第4研究室（社会彫刻・行為の芸術）

Yoshinari Nishio

西尾美也

准教授 | 美術家・ファッションデザイナー

1982年奈良県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。博士（美術）。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）、奈良県立大学准教授などを経て、2022年10月より現職。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目したプロジェクトを国内外で展開。ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」を手がける。

日常生活批判から「問い」が生まれる。それを深く勉強し、仮説を立て、調べ、実験や考察することが学問だが、先端ではその「やり方」に制限がない。技術や鑑識眼も前提ではない。問いを洗練させ、独自の方法で社会に投げかけること。何かをやってみることで世界を理解しようとすること。先端の門戸は、主体的、創造的に物事を探究しようとするすべての人に開かれている。

第5研究室（舞台美術）

Ai Harada

原田 愛

准教授 | 舞台美術家

1981年バージニア（アメリカ）生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。空間を柔らかく変容させることを目指し、舞台美術家として活動している。主な参加作品に「あの出来事」（2019、新国立劇場）、「ミュージカル手紙」（2022、東京建物Brillia Hall）、「スラムドッグ$ミリオネア」（2022、シアタークリエ）、「ライカムで待っとく」（2022、KAAT神奈川芸術劇場）など。

学生時代、より専門的な学びの機会を求めて、私は本学デザイン科を経て大学院では先端芸術表現専攻へ進学しました。様々なアプローチで芸術に関わる教員からの指導、そして学生同士の交流によって、「メディアを横断する」ことの豊かさ、面白さを知りました。私の創作活動は、この時の経験が原点となっています。みなさんと一緒に、創造性について深く思考する場を作りたいと願っています。

第6研究室（コミュニティとアート・臨床心理）

Min Nishihara

西原 珉

准教授 | キュレーター・心理療法士

東京都生まれ。90年代の現代美術シーンで活動後、渡米。ロサンゼルスでソーシャルワーカー兼臨床心理療法士として働く。心理療法を行うほか、シニア施設、DVシェルターなどでコミュニティを基盤とするアートプロジェクトを実施。2018年からは日本を拠点にアーティストや作り手のための相談と心理カウンセリングのほか、アートプロジェクトやセラピューティックな手法を通じたコミュニティのケアを探究。秋田公立美術大学教授を経て、2024年4月より現職。同時に秋田市文化創造館館長を務める。

波が砂に描く線のように、予測もコントロールもできない創造のプロセスは、不断に進化しています。それは飛躍や不連続を怖れず、失敗すら楽しみながら、つかまえようのないものをつかまえようとする、自由と情熱の波打ち際です。わたしたちはその波打ち際の「先端」で、描かれる線の先を追いながら、一瞬ごとに表現の限界を超えていきます。皆さんと共にそこに立つことを、心から楽しみにしています。

アートアンドサイエンス

第7研究室（実験音楽・メディア表現）

Kiyoshi Furukawa

古川 聖

教授 | 音楽家・作曲家

1959年東京都生まれ。高校卒業後渡独、ベルリン芸術大学、ハンブルク音楽演劇大学にてイサン・ユン、ジェルジ・リゲティのもとで作曲を学ぶ。スタンフォード大学で客員作曲家、ハンブルク音楽演劇大学で助手、講師、ドイツのカールスルーエのZKMでアーティスト研究員を歴任。理化学研究所など多くの学外組織と共同研究を継続的におこない、2018年には音とテクノロジーを核とする東京藝大発ベンチャーcoton社を起業している。

先端芸術表現科でいう所の領域横断性とはアートの枠内での移動や組み合わせではなく、アートとアートではないものの間を行き来しつつ、アートの外側の様々な場所に（たとえそれが困難な事であるにしろ）点を打ち続け、そのメタポジションから見えてくる、アート各領域の関係性を探るような、絶え間の無い動きのようなものだと思う。

アートアンドサイエンス

第8研究室（メディアアート）

Kazuhiko Hachiya

八谷和彦

教授｜メディアアーティスト

1966年佐賀県生まれ。九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）画像設計学科卒業。卒業後、CIコンサルティング会社勤務と並行してアーティスト活動をはじめ、メールソフトPostPetを開発しSo-netからリリース。その後、自分達の会社PetWORKsを設立し、12年社長を勤めた後、2010年10月より現職。「メールを運ぶ」「人を乗せて飛ぶ」など、機能がある作品を作っている。

踊ってもいいし、音でもいいし、文章を書いても、写真でも映像でもいい。……という風に「何を作ってもいい」と言われると、意外と人は悩んでしまうものかも。学生を見ると、たまにそういうことも感じます。けど、そういう風に真剣に悩む時間を人生の中で持つのは、実はとても大事で貴重、と思っているのです。

素材と創造性

第9研究室（写真・空間表現）

Tokihiro Sato

佐藤時啓

教授｜美術家・写真家

1957年山形県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。写真の構造に着目した光の表現や普及活動を自身の身体性に根ざした活動として続けている。主な個展として、酒田市美術館（1999）、シカゴ美術館（2005）、「Presence or Absence」Frist Center for the Visual Arts（2010）、「そこにいる・そこにいない」東京都写真美術館（2014）、「八戸マジックランタン」八戸市美術館（2022）など。第65回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

先端創設時から参画した。本学彫刻科出身者として当初は戸惑うことも多かった。しかし今は確実に言える。「なぜそのメディウムで表現するのか?」ということが対照化され、社会との関係性、そして芸術の置かれた立場などについて客観視できる場所。作ることと考えることの両輪を実現し実践する現場。先端はそんな場所なのだ。

第10研究室（絵画・インスタレーション）

Tsuyoshi Ozawa

小沢 剛

教授｜美術家

1965年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科壁画専攻修了。代表作に、地蔵建立、なすび画廊、相談芸術、醤油画資料館、ベジタブル・ウェポン、「帰って来た」シリーズなど。「西京人」や「ヤギの目」など新しい形態のコレクティブにも積極的だ。主な個展に「同時に答えろYesとNo!」（2004年、森美術館）、「不完全 ― パラレルな美術史」（2018年、千葉市美術館）など。第69回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

例えばキリの先っぽが先端であるためには、その後ろに伸びる鋼鉄（スチール）は美術の歴史、あるいは人間の想像力だ。更にその鋼鉄を支える丸く優しい木製の柄は、地球の回転か宇宙のゆらぎだ。それらの力を借りて、キリの先っぽは時代に風穴を開けてゆくのだろう。やがてはキリの先っぽは摩耗してくる。キリの先っぽは常に鋭利でなくてはならない。

助教

寺田健人

非常勤講師

岡村浩志
表 良樹
狩野みき
川越健太
樽沼範久
新明就太
豊永純子
永井文仁
西原 尚
藤原えりみ
間瀬朋成
山本圭太

教育研究助手

川口 蓮
キングドム亜紀子
呉 胤鋒
櫻井莉菜
杉山迦南
諏訪春佳
人見紗操
森岡美樹
吉田有徳

DEPARTMENT OF INTERMEDIA ART

QUESTION & ANSWER

入学試験についてのQ&A

Q｜過去の試験問題を知りたいです。
A｜上野校地の教務課で閲覧できます。東京藝術大学ウェブサイトでも閲覧可能です。

Q｜総合実技は何を意図した試験ですか。
A｜発想力、判断力、集中力、手を動かす力など「考えること」と「作ること」を総合的に試す試験です。

Q｜合格者作品の開示はしないのでしょうか。
A｜一部の作品と論文は入試説明会で公開しています。

Q｜個人ファイル作成にあたり、芸術に関係のない活動履歴も含めた方がいいのでしょうか。
A｜その活動履歴が、先端芸術表現科で勉強したいことに重要な要素であるかを、自分で判断してください。

Q｜試験場所はどこですか。
A｜取手キャンパスで実施します。

Q｜入学試験の日程を知りたいです。
A｜学生募集要項を確認してください。

キャンパスライフについてのQ&A

Q｜舞台や身体表現について勉強できますか。
A｜身体表現を専門にしているカリキュラムや研究室があります。

Q｜アニメーションの企画や制作に興味があるが、映像の演習授業はありますか。
A｜ビデオカメラの撮影方法、映像編集などの映像演習科目があります。アニメーションを制作している学生もいます。

Q｜授業中の学生たちの雰囲気はどうでしょうか。
A｜課題制作や藝祭など、1年を通して一緒にいる時間が多いので団結力が強く、良い雰囲気で授業に取り組んでいます。

Q｜学園祭のようなものはありますか。
A｜東京藝術大学祭「藝祭」、11月に取手校地で開催される「取手藝祭」などの行事があります。

Q｜授業料免除・入学料免除の制度はどのようなものですか。
A｜納付が著しく困難であると認められる者に対し、選考のうえ、授業料の全額または半額を免除する制度があります。入学料に関しても同様に、全額または半額を免除する制度があります。

Q｜奨学金の制度はありますか。
A｜様々な奨学金制度があります。詳しくは東京藝術大学ウェブサイト内の「奨学金」の欄を確認してください。

Q｜先端芸術表現科以外の大学施設の利用は可能ですか。
A｜本学には、付属図書館、共通工房、写真センター、芸術情報センターなどの教育研究施設があり利用可能です。

Q｜他の学科との関わりはありますか。
A｜学科を横断して行う授業やプロジェクトがあります。他の学科と一緒に学ぶことや活動する機会があります。

Q｜研究室の配属はどのように決まりますか。
A｜3年次の始まりに研究室希望を調整し、配属先を決めています。

Q｜海外留学や海外展示する機会などがありますか。
A｜国際交流協定校が多数あり交換留学制度を設けています。ヨーロッパ、アジア、オセアニアなど世界の国々に行き学ぶ機会があります。

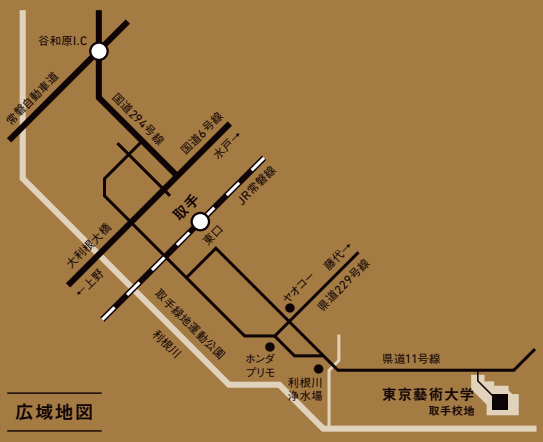
Q｜どのような資格が取得できますか。
A｜教育職員免許状、学芸員資格が取得可能です。

Q｜卒業生の進路や就職先について知りたいです。
A｜作家、キュレーター、教育関係者、編集者、演出家など、非常に幅広い活動を行っています。近年の主な就職先についてはp.13に掲載しています。入学生は、過去の例や枠組みに捕われていない新しい活動を行う人も受け入れています。

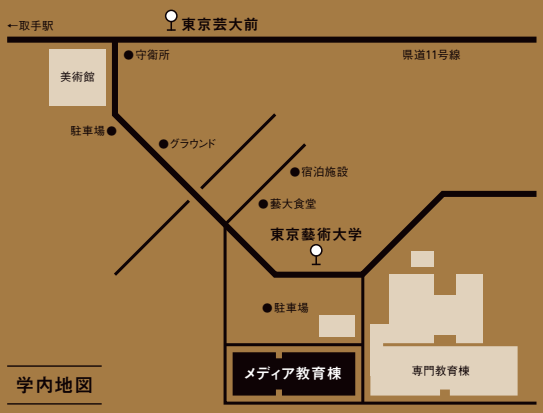
表紙掲載作品 |《〈白〉地図 / blanc:k map》原田茉琳
2024年 / 木材、木端材 / 撮影：石橋幸大、原田茉琳

原田茉琳 Marin HARADA

2000年生まれ。2024年、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。同年、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻（油画）入学。主な展示歴に、グループ展「HERE」Liamgallery（2021年）、二人展「みぎわで」ICHIGOYA谷中銀座店（2022年）、個展「白紙の箱」GALLERY IRO（2024年）など、受賞歴に「東京藝大アートフェス2023」佳作賞（2023年）、「令和5年度先端芸術表現科買上作品認定」（2024年）がある。



広域地図



学内地図

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科
東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
〒302-0001 茨城県取手市小文間5000 メディア教育棟
http://ima.fa.geidai.ac.jp/

交通アクセス

［電車＋バス］JR常磐線「取手駅」東口から、大利根交通バスで約15分「東京藝術大学」または「東京芸大前」下車。［車］常磐自動車道「谷和原 I.C」から車で約45分。

東京藝術大学

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科 / 東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
編集・発行：東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科　翻訳：河西香奈　デザイン：森垣 實
※本パンフレットに掲載の情報は2024年5月現在のものです。
図版および文章の無断転載を禁じます。©Department of Inter-Media Art, Tokyo University of the Arts. All rights reserved.